

聖書: ヨシュア記 8 章

説教題: 祝福かのろいか

日 時: 2010 年 6 月 6 日

前の 7 章でイスラエルはアカンの罪のために小さな町アイに負けてしまいました。しかしその罪に対して正しい解決がなされた時、7 章 26 節に「そこで、主は燃える怒りをやめられた。」とありました。こうして主はもう一度イスラエルと共にいて下さるようになったことが、今日の章の 1 節に示されています。「主はヨシュアに仰せられた。」とあります。主が再びイスラエルに語って下さっています。この主の言葉があれば大丈夫！主は「恐れてはならない。おののいてはならない。」と励まして下さって、「戦う民全部を連れてアイに攻め上れ。」と命じます。「見よ。わたしはアイの王と、その民、その町、その地を、あなたの手に与えた。あなたがエリコとその王にしたとおりに、アイとその王にもせよ。」主は今回の戦いでは「分捕り物と家畜だけは、あなたがたの戦利品としてよい。」と言われます。これについては後に触れたいと思います。そして今回の戦い方について指示を与えています。その方法とは、町の後ろに伏兵を置くことです。軍隊を二つに分け、まずアイの町の正面から一つのグループが近づく。それを見てアイの住民が迎え撃つために出て来たら、イスラエルは相手の前から逃げ、彼らに自分たちを追いかけさせて、町を空っぽにする。そうしたら町の後ろに隠れていた伏兵たちが町に入って行って火をつけ、そこを廃墟とするというものです。

ヨシュアは主の指示に従って、勇士たち 3 万人を選び、夜の内に派遣しました。そして自分は正面からアイの町に向かうグループの先頭に立って指揮します。アイの人々は翌朝いち早くイスラエルを発見し、迎え撃つために出て来ます。いよいよ作戦開始です。イスラエル軍は打たれている振りをして、彼らの前から逃げ出します。すると喜んだのはアイの兵士たち。前回より人数の多いイスラエル軍が、また自分たちの前から逃げて行く。彼らは自分たちはこんなに強かったのだと改めて自分たちの素晴らしさに酔いしれつつ、あるいは一人が千人を追うとはこのようなことなのかと優越感に浸りつつ、イスラエルを追いかけたのでしょ。まさかこれが自分たちに災いをもたらす結果になるとは少しも悟らずに。15～16 節：「ヨシュアと全イスラエルは、彼らに打たれて、荒野への道を逃げた。アイにいた民はみな、彼らの後を追えと叫び、ヨシュアのあとを追って、町からおびき出された。」

アイの住民はイスラエルが逃げて行くのを面白がって追いかけて行きましたが、本当に面白いと思っていたのはイスラエルの方だったに違いありません。なぜならすべてのことがあまりにも自分たちの計画通りに進んでいるからです。ここまでおびき寄せられたらいいな、と思っていた場所まで、本当に彼らはこのこやって来た。アイの町は男一人いないもぬけの殻となります。17 節：「イスラエルのあとを追って出なかった者は、アイとベテルにひとりもないまでになった。彼らは町を開け放しのまま捨てておいて、イスラエルのあとを追った。」

いよいよ伏兵たちの出番です。彼らはヨシュアの投げ槍の合図を見て、待ってました！とばかり町に乗り込み、火をつけて回ります。アイの兵士たちが、何だか後ろでバチバチと音がするなと思って振り返った時には、もうすでに後の祭り。20 節：「アイの人々がうしろを振り返ったとき、彼らは気づいた。見よ、町の煙が天に立ち上っていた。彼らには、こちらへも、あちらへも逃げる手だてがなかった。荒野へ逃げていた民は、追って来た者たちのほうに向き直った。」 呆然とする彼らを驚かせたのはそれだけではありません。今まで叫び声をあげて自分たちの前から逃げていたイスラエル軍が突

然こちらに向き直った。そして反対側からは町に火をつけて意気あがる伏兵たちもやって来て、挟み撃ちの格好になる。この時になって初めて彼らは、自分たちが実ははめられていたのだ、ということを知ったのでしょ。しかしもう遅過ぎた。彼らは逃げる場所もなく、あえなく全滅したのです。イスラエルはこうして2回目の戦いにおいて、アイに対して圧倒的な勝利を収めることができたのです。

この記事は私たちにどんなメッセージを語っているのでしょうか。それは何と言っても、主が共にいて下さる祝福についてでしょう。イスラエルは前の7章でアカンの罪のために勝利することができませんでした。それを妨げたのは罪でした。イザヤ59章1～2節にこうあります。「見よ。主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」しかし罪の問題が解決されるなら、勝利が再び与えられる。別な言い方をすれば、私たちは小さな課題に対しても、主の力に頼らなければならないということです。イスラエルは神との正しい関係になかった時、小さな町アイにさえ負けました。同じように私たちも主との関係を大事にしないなら、小さな課題さえ乗り越えることはできない。取るに足りない問題だと言って自分の力に頼って歩む時、私たちは失敗するのです。そうではなく、どんな時もまず主との関係を大事にし、そこから一つ一つに主の力と導きを求めて、主が下さる勝利に歩いて行きたいのです。

先に触れたように、今回の戦いで主は戦利品を取って良いと言われました。エリコの戦いの時は一切取ってはならないと言われていたのに、今回は取って良いと言われたのはなぜでしょうか。それはエリコの戦いは、この地における最初の戦いだったため、初穂をみな主にささげるという意味があったと考えられます。しかし今回、主は戦利品を取ることをイスラエルに許し、こうしてイスラエルの必要を満たされました。そのことを覚える時、前の章に出て来たアカンはもうちょっと待ちさえすれば、と悔やまれます。あの時、主の言葉に逆らって急いで分捕り物に手を伸ばさなくても、もう少し待てたら、欲しいものを存分に手に入れることができたのに、と。ですから大切なことは、神の国とその義とをまず第一に求めること。主は決してご自分の民を欠乏した状態の中に放置されません。最善の時に、豊かに施し、祝福して下さいます。この神の気前良さに信頼しない時、私たちは御言葉に逆らっても自分の力で祝福をもぎ取ろうとして罪を犯し、かえって災いを招きます。そうではなく、主に信頼して、御言葉に忠実に従う歩みをするところに、主は祝福を備えていて下さり、私たちの必要を豊かに満たして下さいます。

最後30～35節には、ゲリジム山とエバル山における祝福とのろいの言葉についての記事が記されています。これについては申命記27章で命じられていました。申命記27章を参照したいと思います。そこには約束の地に入った後、エバル山に行つてなすべきことが記されていますが、まさに今日のヨシュア記8章で記されていることと同じことが言われています。5～6節には、主のための祭壇に鉄の道具を当ててはならないこと、自然のままの石で主の祭壇を築かなければならないことが言われています。続く6～7節には全焼のいけにえ、次いで和解のいけにえをささげるべきことが言われています。また8節に、この石の上に――この石とは2～3節にありますように、大きな石の上に石灰を塗ったものことと思われまが、――その上にみことばを書き記すべきこと。そして12～13節にゲリジム山とエバル山にそれぞれ6部族ずつ分かれて、祝福とのろいの言葉に応答すべきことが言われています。具体的などんなものだったか、15節から少し読んでみます。「職人の手のわざである、主の忌みきらわれる彫像や鑄造を造り、これをひそかに安置する者はのろわれる。」民はみな、答えてアーメンと言

なさい。「自分の父や母を侮辱する者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。「隣人の地境を移す者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。「盲人に間違っただ道を教える者はのろわれる。」民はみな、アーメンと言いなさい。云々。そして28章に入って、1節を見ますと、「もし、あなたが、あなたの神、主の御声によく聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を守り行うなら」と語られて、その者にどんな豊かな祝福が注がれるかがずっと語られています。2節だけ読んでみます。「あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うので、次のすべての祝福があなたに臨み、あなたは祝福される。」そして同じ章の15節からを見ると、今度は反対に「もし、あなたが、あなたの神、主の御声に聞き従わず、私が、きょう、命じる主のすべての命令とおきてとを守り行わないなら、次のすべての呪いがあなたに臨み、あなたは呪われる。」と語られて、その者にどんなのろいが臨むかが、しばらく語られています。16節だけを読むと「あなたは町にあつてもろわれ、野にあつてもろわれる。」とあります。このような祝福とのろいの言葉が、このアイの勝利の後に朗読されたことの意義は何でしょうか。それは皆さんもお分かりでしょう。それはこれこそ、実際の戦いよりもっと重要なことであることをイスラエルがもう一度理解し、確認するためです。イスラエルにとっての真の戦いとは、単に目の前のカナン人に勝つことではないのです。彼らにとって一番重要な戦いは、実は主の御言葉に聞き従う生活をするかどうか、ということなのです。その御言葉に聞き従う生活がおろそかにされた時、彼らは小さな町アイに負けました。反対に神との正しい関係に立った時、彼らは同じアイに圧倒的に勝利することができました。つまり本当に大事なものは、軍事的な戦いよりも、御言葉に従う生活なのです。これを抜きにして、ただ「神様、ああしてください、こうしてください」と目の前の問題について祈っても意味がない。御言葉に聞き従って歩むこと、そこにあらゆる祝福が付いてくるのです。

しかしこの祝福とのろいの言葉が朗読され、民がアーメンと答える出来事に先立って、エバル山の祭壇でいけにえがささげられたことにも注目したいと思います。最初の全焼のいけにえは、いけにえを全部燃やし尽くすものです。そこから神にすべてをささげること、すなわち献身を象徴すると一般に理解されていると思います。しかしレビ記1章4節の規定に「彼を贖うため」とありますように、贖いという意味もこの全焼のいけにえの重要な要素として含まれています。その贖いとは、個々の罪に対するものと言うよりは、人間に付きまとう根本的な罪深さを取り扱うものと考えられます。まず彼らはその全焼のいけにえをささげた。そして次に和解のいけにえをささげた。和解のいけにえとは、いけにえの脂肪と腎臓などを焼いて煙にして神にささげ、胸と右ももは祭司アロンとその子らに、残りの部分は民が食するというもので、これは神が招いて下さる食事会を意味するものでした。それは贖われた者の神との和睦を象徴しました。申命記27章7節でも「それを食べ、あなたの神、主の前で喜びなさい。」と言われています。このように罪の赦しを受け、神との正しい平和の関係を喜ぶという恵みにまず立たせて頂く。その上で彼らはこの祝福とのろいの言葉を聞き、祝福の道に歩んで行くのです。

これから私たちは聖餐式にあずかります。大切なのは恵みを頂いて主との正しい関係に立たせて頂くことです。主が差し出して下さっているキリストによる贖いの恵みに心から感謝してあずかることです。そしてそのことに基づく神との平和を心から喜び、祝うことです。このような恵みに生かされていることを感謝して、私たちは神が仰せになっている御言葉に従う生活へ進んで行く。私たちそれぞれの生活には色々な課題があるでしょう。具体的で現実的な願いがあるでしょう。しかし私たちは

ただそれを祈るのではなく、主がはっきりと示している、より根本的な祝福の道に歩むことを何よりも大切にして行きたい。軍事的な戦いよりも、御言葉に従う生活が大切だというこの章のメッセージに生きて行きたい。その時、主はいつも私たちと共にいて下さって、私たちはその主によって何をしても祝福され、どこにいても祝福されるという大いなる恵みの世界に生きて行くことができるのです。